ふるさとから挑戦

第48話　本物の誇り①

産地に忍び寄る偽造品の影

「うちの美川仏壇と何か違うんやけど」。1989（平成元）年に小松市で開いた展示会で、当時美川仏壇組合長だった北島与八郎(78)は、不安げな表情を浮かべた夫婦に声を掛けられた。夫婦が買ったばかりの「美川仏壇」と、展示されている仏壇とでは、金具の色合いが違うというのだ。北島はピンと来た。「とうとううちにも来たか」。

バブル景気に沸く当時、右肩上がりに売り上げを伸ばすこの業界に、「偽造品」が出回り始めていた。メーカーがプラスチックや合板など安価な材料を使って一括生産し、各産地の特徴を模倣するのだ。手作りを信条とする「美川仏壇」も、知らぬ間に、大量生産の偽物に浸食されたらしいのだ。

美川ゆえの技

美川仏壇を手にした人が、本当にその真価を知るのは10年後、20年後だという。丁寧に塗り上げられた漆の光沢や、細やかな蒔絵の輝きは、時を経ても衰えを見せないからだ。確かな技術に裏打ちされた高い品質が口づてで評判を呼び、手取川河口の小さな産地に、全国から注文が舞い込むようになった。

もっとも、その確かな技術も、手取川の河口という土地柄によって培われたといってよい。白木の木地に施される「錆付け」は、輪島塗の汁わんと同じ技法で、湿気があっても漆がはがれない。これは、度重なる「あばれ川」のはんらんを経験し、水に浸っても修復できる工夫が求められたからだ。

堅牢な造りと荘厳な美しさを兼ね備えた美川仏壇
＝白山市美川新町

くぎを使わない「ホゾ組立」が取り入れられたのは、北前船の長い航海でもさび付かないための先人の知恵だ。美川は江戸後期から北前船の寄港地として栄え、仏壇も重要な産物として全国へ運ばれた。くぎを使えば、運搬中に、そこからさびが広がってしまう。

加賀藩の工芸技術を吸収し、金箔や蒔絵、漆の生地に型版で立体的な文様を施す独自の「堆黒」の技法も発展した。「銭屋五兵衛が使っていた立派な仏壇が今でも残っとるんや」と北島は胸を張る。しかし、こうした歴史と伝統を踏みにじる偽造品が、ついに出てきたらしいのだ。

「全く違う」

北島は、実際に販売された偽造品を見てみた。確かに、宮殿や須弥壇などの形はそっくりだった。しかし、板は接着剤で張り付けられ、たたくと軽い音がする。塗りは化学塗料の吹き付けという乱暴な代物だった。

北島をはじめ、職人たちは冷静だった。「本物とは全く違う。心配せんでいい」。危機に直面してなお、あまりの品質の違いから、取るに足らないものだと、関係者のだれもが思った。ところが、職人衆のまっすぐな自信はやがて、打ち砕かれることになる。（藤本典子）

（敬称略）